

Takashi AKIYAMA Poster Museum Nagaoka

2013-07-01

# APM news 083

## 秋山孝ポスター美術館 長岡

歴史的建造物・金庫扉と雁木のある美術館 (旧北越銀行宮内支店)



〒940-1106 新潟県長岡市宮内2-10-8  
TEL 0258-39-1233

第19回美術館大学 6月1日(土) pm4:00~5:30/受講者:68名/講師:御法川哲郎、秋山孝  
『『ポーランドポスターの巨匠 in 長岡』について』



「ポーランドポスターの巨匠 in 長岡」は、秋山館長、御法川氏、そして学校法人高澤学園からお借りしたコレクションによって構成されている。高澤学園には貴重なポスター作品をお貸しいただき、また、長岡造形大学には御法川氏のポーランドポスター研究をご支援いただいた。多くの方々のご協力の下に展覧会を開催することができた。秋山館長がポスターの収集を始めたのは、恩師・福田繁雄先生の「本物を見ろ」という一言による。それまでもポスターの研究は行っていたが、福田先生の言葉により、一枚一枚を自分の目で確認し、研究し、コレクションしていった。

本展覧会は、ポーランドポスターの中でもリアルな表現で表されている作品を選んだ。これは御法川氏の強い希望によるものである。御法川氏が初めてポーランドポスターに魅了されたのは予備校時代で、偶然手にとったカタログの中にヴァウスキの「カリギュラ」を見つけたのがきっかけである。それまで見ていた日本のポスターは、資本主義的な明るさを持った作品が多かったが、ポーランドのポスターは文学的な暗さを持った作風のものが存在していた。また、一般的なポスターには演者の姿などが登場するが、ポーランドのポスターは作者が題材から読み取ったイメージを自由に表現している。たとえばアルペール・カミュ作「カリギュラ」の映画ポスター。これは暴君として知られるローマ帝国第3代皇帝カリギュラの内面を描いたものである。筋肉や血管の露出した顔の化け物が、目を見開き、血を思わせる印象的な赤と共に、見るものに衝撃を与える。

秋山館長からは、各ポスターと作家の特徴を解説していただいた。スタロヴェイスキはセピア色の地に白黒のコンテで描いており、「スリー・トル・ウーマン」は3人の女性を顔ではなく胸で表現するという手法をとっている。ロソハは日本人に受け入れられやすい作家で、どこか余韻を感じさせる作品が多い。サドフスキは不透明な絵の具を使っており、色味を抑えた表現が特徴である。この時代のポーランドポスターは文化的なイベントの告知ポスターが多く、商業ポスターはない。それは当時のポーランドが社会主義国だったことによる。社会主義国では物資は分配制なので、消費を奨励する必要がない。よって商業ポスターを作る必要がなく、代わって人々を楽しませるイベントのポスターが作られたのだという。ソビエトやチェコスロバキアなどは同じ社会主義国でも表現に対し厳しい規制がかけられたが、ポーランドは文化的なものに対する寛容さがあり、発展していったのだと、秋山館長より解説がなされた。最後に、「今回の展覧会で取り上げたポスターは、ポーランドポスターのほんの一部である。これからも理解と分析を進め、研究を発表していきたい」と秋山館長より一言があり、第19回美術館大学は締めくくられた。(APM公式ホームページより抜粋)